# 高等学校における英語教育が日本人英語学習者の前置詞の習得に与える影響

須田　孝司・岡村　明夢

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第17巻第 2 号（2019年 3 月）抜刷

【論 文】

# 高等学校における英語教育が日本人英語学習者の前置詞の習得に与える影響

須田　孝司・岡村　明夢

## 1．はじめに

日本人英語学習者だけではなく，英語を母語としない学習者にとって，英語の前置詞はなかなか習得することが困難な項目の 1 つである（Swan，1995）．前置詞には，場所・時・状態・原因・道具・目標・方向・所属など様々な用法があり，学習者がその用法に合った前置詞を適切に使い分けることは難しい．また，前置詞の中でも同じ用法を持つ前置詞がいくつかあり，それらの使い分けもなかなか難しいと考えられる．例えば，at，in，on は（1）のように，共通して場所を表す用法を備えている．

（1） a. He waited for me ***at*** the bus stop.
b. I did my homework ***in*** my room.
c. I saw the dog ***on*** the street.

（1）のように，同じ用法を持つ前置詞であっても細かなニュアンスに違いがあり，英語の母語話者はこれらの前置詞を状況に応じて使い分けている．しかし，多くの日本人英語学習者にとってその区別を身につけることは簡単ではない．

このように，前置詞の習得が困難な理由には様々な要因があるが，なぜ日本人英語学習者にとってこれらの前置詞の区別が困難であるのか，またどのように前置詞を区別してしているのか，ということについてはよくわかっていない．本研究では，日本人大学生を対象とし，日本の高校で使用されている教科書での前置詞 at，in，on の扱いが，日本人英語学習者の前置詞の習得にどのように関係しているのか調査を行う．

本稿の構成は以下の通りである．第 2 節では，英語の前置詞と日本語の助詞を比較し，第 3 節では，高校の教科書における前置詞の使用に関する調査結果を報告する．第 4 節では，日本人の大学生を対象とした実験について説明し，続く第 5 節ではその結果を示す．第 6 節では，日本人英語学習者の前置詞の習得について学校教育の影響の観点から議論し，第 7 節でまとめを述べる．

## 2．英語の前置詞に関連する日英語比較

### 2.1. 英語の前置詞

英語の前置詞は，名詞句をその目的語として取り，副詞的，または形容詞的な働きをする前置詞句を作る（安藤，2012）.

（2） a. The cat is sleeping ***in*** the room.
b. The cat ***in*** the room is mine.

（2）では，in the room という前置詞句が使われている.（2a）の前置詞句は文全体を修飾する副詞として機能しており，（2b）では前置詞句が主語名詞句である the cat にかかっているため，前置詞句としては形容詞的な働きをしている.

また，英語の前置詞は，1 つの前置詞が複数の用法を持つこともある（安藤, 2012）. 例えば，at には（3）のように 4 つの用法がある.

（3） a. ＜場所＞ We met the woman ***at*** this restaurant.
b. ＜時＞ My father has breakfast ***at*** 8.
c. ＜状態＞ Set your mind ***at*** ease.
d. ＜原因＞ He was surprised ***at*** the discovery.

（3a）では，at の目的語に this restaurant が使われており，場所を表している.（3b）では，目的語に時刻を表す語句が置かれており，（3c）では，at ease という形で「気楽に」という意味を表す状態の用法である．さらに（3d）の at は原因を表しており，目的語の the discovery が驚いた原因となっている.

このように英語の前置詞は，名詞句を目的語として取り，1 つの前置詞が様々な用法を持つことができる.

### 2.2. 日本語の助詞

英語の前置詞に対応するものとして日本語には助詞があり，前置詞と同じような働きをすると考えられる．例えば，日本語では，（4）のように名詞句に助詞の「に」や「で」を組み合わせることにより場所を表すことができる[1].

（4） a. テーブルの上**に**みかんがある.

1 日本語の場所を示す助詞「に」と「で」には，その使われ方に差があり，「に」は存在の場所を示す場合に使われ，存在以外の場合には「で」が使われる（庵，2017）.

b. 公園**で**子供が遊んでいる.

また日本語の助詞は，英語の前置詞と同様，1 つの助詞が様々な用法を持つ場合がある.（4a）の助詞「に」は場所を表しているが,「に」はその用法以外にも（5）のように時間や着点を表すことができる.

（5） a. 駅で 6 時**に**会おう.
b. 彼は明日アメリカ**に**行きます.

このように日本語では，名詞句の置かれる位置が英語とは異なっているが，1 つの助詞が様々な用法を持つという点では英語と類似している.

### 2.3. 日英語比較

英語の前置詞と日本語の助詞は，名詞句を目的語に取るということと様々な用法があるということでは共通しているが，まったく同じように使うことが出来るわけではない．例えば，場所を示す英語の前置詞 at，in，on は，（6）のように目的語名詞句が示す場所の広さや形により異なった前置詞が使われる.

（6） a. I met him ***at*** the bus stop.
b. I met him ***in*** the elevator.
c. I met him ***on*** the first floor.

（6a）の at は，狭い領域（地点）である the bus stop を目的語名詞句として取り，（6b）の in は壁で囲まれている the elevator を，（6c）の on は床の上という意味の the first floor をその目的語に取っている．したがって，場所を示す前置詞 at，in，on の場合，比較的狭い領域には at，囲まれた場所には in，人が上に乗るような場所には on というように，目的語名詞句の種類により異なった前置詞が使われることになる.

一方，日本語にはそのような区別はなく，（6）に対応する日本文では，（7）のように全て「で」が使われる.

（7） a. 私はバス停**で**彼に会った.
b. 私はエレベーター**で**彼に会った.
c. 私は 1 階**で**彼に会った.

さらに，日本人英語学習者は，前置詞を日本語訳と関連付けて理解することがあるが，英語の前置詞は，常にある特定の日本語表現と結びつくわけではない．例えば，

場所を表す on は「〜の上に」と訳されることが多いが，（8）のようにその日本語訳が当てはまらない場合もある．

（8） a. There is a book ***on*** the table.
b. There is a picture ***on*** the wall.
c. *The sun rose ***on*** the house.

（8a）の on は「〜の上に」と解釈することができるが，（8b）の場合には「〜の上に」と訳すことはできない．また（8c）では，「〜の上に」という意味を表す前置詞として on を使うことができず，above を使う必要が生じる．つまり，（8c）は英語に対応する日本語表現「〜の上に」が前置詞の選択に影響を与え，on を過剰に使用してしまう例である（Yamaoka, 1995, 1996）．

このように，日本人英語学習者は，英語の前置詞を日本語の助詞に対応させることにより，比較的容易に前置詞を習得できる場合もあるかもしれない．しかし，学習者はそれぞれの前置詞がどのような状況を表現する際に使われるのか，前置詞の目的語にどのような名詞句が使われるのか，またどのような動詞と一緒に使われるのかなど，前置詞に絡む要素を体系的に理解することが求められる．そのため実際は，日本人英語学習者にとって前置詞はなかなか習得が難しい項目になっている．

## 3．学校教育における英語の前置詞

場所を示す英語の前置詞 at，in，on は，日本の学校英語教育の比較的初期の段階で教えられる．例えば，New Crown（三省堂，2011），Total English（学校図書，2015），New Horizon（東京書籍，2014）では，1 年生のテキストで導入されている．したがって，日本人英語学習者にとってその 3 種類の前置詞は非常になじみのある前置詞である．

これまでの先行研究においても，その 3 つの前置詞の習得が研究されており，日本人英語学習者は用法により困難度が異なるという提案もある（高木，2004，2005）．しかし，なぜ困難度に差があるのか，また場所を示す 3 つの前置詞の間でどのような違いがあるかなど，前置詞習得の困難さの要因についてはあまり議論が行われていない．そこで本研究では，日本の学校での英語教育が，場所を示す前置詞 at，in，on の習得にどのような影響を与えているのか検証する．そのため，まず日本の高等学校のコミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲで使われている教科書を利用し，各前置詞の出現頻度とその目的語名詞句の種類を調べる．

### 3.1. 調査方法

学校での英語教育の影響を考察するため，本研究では 4 種類の教科書（My Way（三省堂，2015），Discovery（開隆堂，2015），Provision（桐原書店，2015），One World（教育出版，2015））を各 3 年分，計 12 冊を使い，場所を示す前置詞 at，in，on がどのような目的語名詞句と一緒に利用されているのか，その出現頻度を調べる．この調査では，場所を示す前置詞 at，in，on が使われている英文を教科書の本文中から抜き出した．その結果，目的語名詞句は，建物，地域，物，屋内の場，屋外の場の 5 つに分類することができた．

### 3.2. 結果

4 種類の教科書における英語の前置詞 at，in，on の出現頻度を表 1 に，表 2 に前置詞ごとの合計数を示す．

表 1　英語の前置詞 at，in，on の出現頻度

| **M** | at | in | on | **D** | at | in | on | **P** | at | in | on | **O** | at | in | on |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 建物 | **4** | 20 | 2 | | **15** | 13 | 0 | | **26** | 15 | 0 | | **6** | 4 | 0 |
| 地域 | 0 | **137** | 0 | | 0 | **79** | 3 | | 1 | **116** | 5 | | 0 | **86** | 1 |
| 物 | 1 | 15 | **12** | | 0 | 9 | **6** | | 3 | 15 | **18** | | 0 | 4 | **3** |
| 屋内の場 | 2 | 4 | 3 | | 4 | 10 | 1 | | 6 | 9 | 2 | | 2 | 0 | 2 |
| 屋外の場 | 2 | 8 | 8 | | 1 | 8 | 5 | | 1 | 8 | 11 | | 1 | 9 | **4** |
| 合計 | 9 | 184 | 25 | | 20 | 119 | 15 | | 37 | 163 | 36 | | 9 | 103 | 10 |

M: My Way，D: Discovery，P: Provision，O: One World

表 2　前置詞ごとの合計

| | at | in | on |
|---|---|---|---|
| 建物 | **51** | 52 | 2 |
| 地域 | 1 | **428** | 9 |
| 物 | 4 | 43 | **39** |
| 屋内の場 | 14 | 23 | 8 |
| 屋外の場 | 5 | 33 | 28 |
| 合計 | 76 | **607** | 99 |

表 2 を見ると，場所を表す at の出現回数は 76 例，in は 607 例，on は 99 例であり，in の出現回数は at や on よりも圧倒的に多いことがわかる．また，前置詞の目的語として，at で集まった 76 例の内，建物が 51 例と最も多く，in については地域が 428 例，

on については物が 39 例とそれぞれ最も多く使用されていることが明らかになった．

本研究では，これらの最も多く使用されている目的語名詞句をコア名詞句と呼び，これらコア名詞句が，日本人英語学習者の場所を示す前置詞の習得にどのような影響を与えているのか検証を行う．もしコア名詞句が目的語に使用されている場合，日本人英語学習者が適切に前置詞を選択できるとすれば，日本の学校教育でのインプットが，日本人英語学習者の前置詞の習得に効果的に機能していると考えられる．

## 4．英語の前置詞の習得実験

### 4.1. 実験参加者

本実験の参加者は，静岡県立大学国際関係学部の 3 年生と 4 年生 27 名と大学院生 2 名の計 29 名である（平均年齢 20.9 歳）．英語圏の国へ留学した経験のあるものもいたが，今回は習熟度の差を考慮せず，データ分析を行った．

### 4.2. マテリアル

実験文は，それぞれの前置詞の目的語に，コア名詞句を使用している文とその他の名詞句を使用している文に分けた．場所を表す at は，コア名詞句として建物を表す 5 つの名詞句（station，house，school，hospital，restaurant）とそれ以外の 5 つの名詞句（entrance，ski resort，funeral，table，zoo）を使った．in のコア名詞句としては，地域を表す 5 つの名詞句（America，Tokyo，village，town，city）とそれ以外の 5 つの名詞句（elevator，room，kitchen，forest，garden）を，on のコア名詞句としては，物を表す 5 つの名詞句（rock，plate，sofa，table，bed）とそれ以外の 5 つの名詞句（grass，stage，street，floor，balcony）をそれぞれ使用した．したがって，各タイプ 5 文ずつの英文（30 文）と本研究とは関係のない前置詞を選ぶ問題（30 文）を用意し，実験を行った．

### 4.3. 実験方法

前置詞の習得データは多肢選択方式により集められた．実験参加者には，（9）のように空欄のある英文とその空欄に当てはまると思われる 4 つの選択肢が書かれているテスト用紙が配られた．実験参加者は空欄に当てはまる前置詞をその 4 つの選択肢の中から 1 つだけ選ぶよう指示された．

（9）実験文の例

a. We stopped (　　) a restaurant to eat lunch.

a. to　b. at　c. for　d. on

（9）では，at のコア名詞句である建物が使われているため，b の at が正答となる．

解答の際，実験参加者の直観で選んでもらうため，一度答えた問題は修正してはいけないという注意が与えられた．また，日本語の影響を防ぐため，問題文に日本語を使用せず，英文だけを読んで判断してもらった．問題文は全部で 60 問あり，解答には 15 分の制限時間を設けた．実験開始から 15 分経ったところでやめの合図を送ったが，その時までに解答を終えていなかった実験参加者はいなかった．

## 5．結　果

各タイプの平均正答数を表 3 に，またそのグラフを図 1 に示す．本実験では各タイプ 5 文ずつあったため，最高点は 5 点となる．

表 3　平均正答数

| | at | | in | | on | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 建物 | その他 | 地域 | その他 | 物 | その他 |
| 平均正答数 | 4.4 | 2.9 | 4.9 | 3.6 | 4.7 | 3.1 |
| SD | 0.55 | 1.09 | 0.04 | 1.74 | 0.29 | 0.82 |

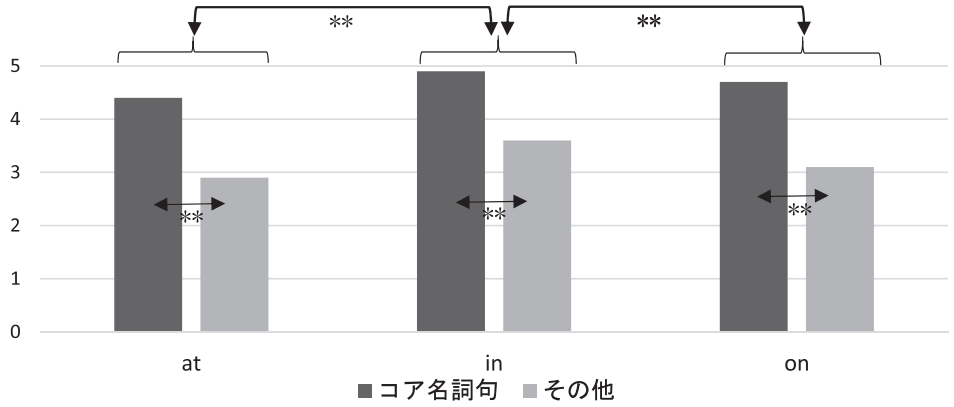


図 1　平均正答数

場所を示す前置詞 at のコア名詞句（建物）の平均正答数は 4.4 であり，その他の名詞句の平均正答数は 2.9 であった．地域の in の平均正答数は 4.9，その他の場合は 3.5 であり，物の on の平均正答数は 4.7，その他の名詞句は 3.1 であった．2 要因の分散分析（前置詞×タイプ）を行うと，前置詞間の主効果に有意差があり（$F$ (2, 40)＝7.031，$p$＜0.01），またタイプ間にも有意差があった（$F$ (1, 20)＝128.993，$p$＜0.01）．

しかし，前置詞とタイプの間に交互作用はなかった（$F$ (2, 40)＝0.231，$p$＞0.7 ns.）．前置詞間の単純主効果による下位検定では，in と at では in の方が有意に正答数が多く，in と on においても in の方が有意に多かった．しかし，at と on の間には有意な差が見られなかった（in > at = on）．

## 6．議　論

### 6.1. 学校教育の影響

高校の教科書では，各前置詞が特定の名詞句を目的語に取っており，それぞれの前置詞のコア名詞句は，at が建物，in が地域，on が物であった．日本人英語学習者の前置詞習得の実験結果を見ると，前置詞の目的語がコア名詞句であれば，前置詞を正しく選択できるが，そうでなければ適切に前置詞を選ぶことができないことがわかった．この結果から，学校教育での前置詞の使用頻度が日本人英語学習者の前置詞の習得に影響を与えていると考えることができる．

### 6.2. 3 つの前置詞の差について

本実験では，日本人英語学習者は，前置詞 in を at や on よりも正しく選択することが明らかになった．教科書の分析では，場所の前置詞の出現頻度では in が at や on より圧倒的に多く使用されており，前項と同様，学校教育の影響があると考えることができる．

また，日本人英語学習者が誤って選んだ前置詞を見てみると，at や on が使われるべき場合であっても in を選んでいることが多かった．このような in を過剰に使用する傾向は，学校教育における in の頻度の影響というよりも，in が目的語に取ることができる名詞句の種類の多様性に関係しているとも考えられる．つまり，前置詞 in が目的語に取ることができる名詞句は，at や on が取ることのできる名詞句より範囲が広いため，at や on が適切であった場合であっても日本人英語学習者は in を選んだと思われる．例えば，in は（10）のように様々な大きさや形の場所を示す名詞句を目的語に取ることができる．

（10）a. There is a doll ***in*** the box.
　　b. The cat is sleeping ***in*** the room.
　　c. He read the book ***in*** the library.
　　d. We met the woman ***in*** the city.

in の目的語名詞句を見てみると，（10a）の box のような小さい物を取ることができるだけではなく，room のような壁に囲まれた空間（10b）や library のような建物（10c）

を示す名詞句を目的語に取ることもできる．もちろん，（10d）のように，in のコア名詞句である地域を示す名詞句を目的語に取ることも可能である．一方，at や on は，in よりも表すことができる範囲が限られており，in のように様々な目的語名詞句を取ることができない．例えば，at は（11a）のように，コア名詞句である建物を示す名詞を目的語に取ることができても，物（11b）や囲まれた場所（11c），地域（11d）を示す名詞句を目的語に取ることができない．

（11）a. He read the book ***at*** the library.
b. *There is a doll ***at*** the box.
c. *The cat is sleeping ***at*** the room.
d. *We met the woman ***at*** the city.

また，on も at と同様，（12a）のようにコア名詞句である物を示す名詞句を目的語に取ることができても，囲まれた場所（12b）や建物（12c），地域（12d）を示す名詞句を取ることはできない．

（12）a. There is a doll ***on*** the box.
b. *The cat is sleeping ***on*** the room.
c. *He read the book ***on*** the library.
d. *We met the woman ***on*** the city.

それぞれの前置詞が目的語に取ることができる名詞句の場所の範囲を視覚化すると，図 2 のようになる．

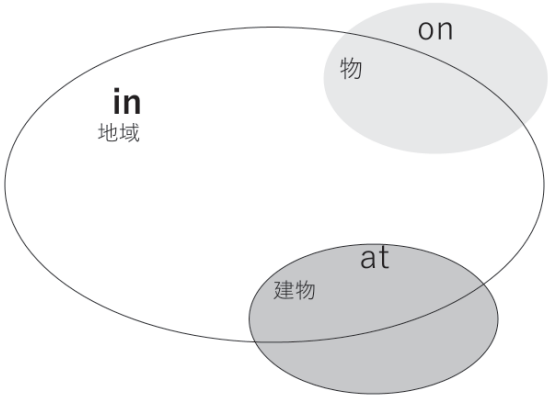


図 2　前置詞 at，in，on が表すことができる範囲

図2では，前置詞inが目的語に取ることのできる名詞句の範囲が，atやonの範囲を包含していることを示している．したがって，inが目的語に取ることができる名詞句の範囲はatやonよりも広く，atやonが示す範囲も含まれる場合があるため，日本人英語学習者は前置詞inを過剰に使用していると思われる（Okamura & Suda, 2018）.

## 7．終わりに

本研究では，日本の学校教育で使用されている教科書での出現頻度が，日本人英語学習者の場所を表す前置詞at，in，onの習得にどのように影響を与えているのか調査を行った．その結果，教科書での前置詞inの出現回数はatやonよりも圧倒的に多く，またatには建物が，inには地域が，onには物が，それぞれコア名詞句として使用されていることがわかった．さらに，日本人大学生を対象とした前置詞の習得実験を行った結果，日本人英語学習者は前置詞の目的語がコア名詞句であれば前置詞を正しく選択できるが，そうでなければ選択が困難になること，inがatやonより適切に使用できること，atやonが適切な場合であったとしても誤ってinを多用することがわかった．つまり，高等学校の教科書での前置詞の使用が，日本人英語学習者の前置詞の習得に影響を与えているというだけではなく，それぞれの前置詞が目的語に取る名詞句の示す範囲が日本人英語学習者の前置詞の選択に影響しており，日本人英語学習者にとって場所を示す前置詞at，in，onの使い分けを困難にしていると考えられる．

しかし，今回の研究では，場所を示す前置詞at，in，onだけを調査対象としているため，日本人英語学習者の前置詞習得全般に，教科書での頻度が影響を与えているかどうか定かではない．今後，前置詞at，in，onの異なる用法に関する頻度の影響だけではなく，他の前置詞についても日本の学校教育における頻度の影響について検証する必要がある．

### 参考文献

安藤貞雄. (2012).『英語の前置詞』東京：開拓社.

庵功雄. (2017).「言語間の類似と創意を捉えるための機能主義的観点：場所を表す「に」と「で」，限定詞「この」と「その」を例に」日本第二言語習得学会 秋の研修会 招待講演.首都大学東京. (2017.10.29).

Okamura, H. & K, Suda. (2018). 'The acquisition of spatial and temporal prepositions at, in and on by Japanese learners of English'. Paper presented at ROCTEFL. 台湾：精華大学. (2018.5.18).

Swan, M. (1995). *Practice English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

高木紀子. (2004).「日本人英語学習者の前置詞習得に関する研究（1）：前置詞の多

義性に焦点を当てる」『東京家政大学研究機構 1：人文社会科学 45』. pp.169-176.

高木紀子. (2005).「日本人英語学習者の前置詞習得に関する研究（2）：前置詞の多義性に焦点を当てる」『東京家政大学研究紀要 1：人文社会科学 46』. pp.205-216.

Yamaoka, T. (1995). 'A prototype analysis of the learning of on by Japanese learners of English and the potentiality of prototype contrastive analysis (part 1)'. *Hyogo-university of Teacher Education Journal* 15. pp.51-59.

Yamaoka, T. (1996). 'A prototype analysis of the learning of on by Japanese learners of English and the potentiality of prototype contrastive analysis (part 2)'. *Hyogo-University of Teacher Education Journal* 16. pp.43-49.

**中学・高校教科書**

Discovery English Communication I, II, III. (2015). 東京: 開隆堂.

My Way English Communication I, II, III. (2015). 東京:三省堂.

New Crown English Series I, New Edition. (2011). 東京: 三省堂.

New Horizon English Course I. (2014). 東京: 東京書籍.

One World English Communication I, II, III. (2015). 東京: 教育出版.

PRO-VISION English Communication I, II, III, NEW EDITION. (2015). 東京：桐原書店.

Total English I. (2015). 東京：学校図書.